

先週私たちは、ペリクスに代わり、新しく総督となったフェストのもとで、パウロの裁判が、実に二年ぶりに開かれるのを見ました。結論としては、パウロがカイザルに上訴し、それをフェリクスが許可することで、パウロのローマ行きが決まったわけですが、ただそれにあたり、フェストとしては、パウロに対する訴えをカイザルに書き送る必要があったのです。ところが、パウロを訴えたユダヤ人たちが、何の証拠もあげることができなかったように、そこにはパウロの罪について書き送るべきことが、何もありませんでした。

そこでフェストは、自分を訪ねて来たアグリッパ王に、パウロのことを持ち出すのです。すると、アグリッパが興味を示したので、パウロは、彼とその妹ベルニケの前で、また彼らにつき添った千人隊長たちや市の首脳者たちの前で、弁明する機会を得ます。ただ相手が、王や権力者ということだけあって、その語る内容によっては、パウロの身が危険にさらされる可能性も大いにあったわけですが、でも、このようなまたとない機会をパウロは生かして主を証するのです。今日は、その弁明の中でパウロが語ったことを見、そして次回に、それに対する人々の応答について見ることにします。

パウロの証については、これまですでに見てきましたので、詳しく見ることはしませんが、ここでも彼は、主イエスに出会うまでの以前の自分と、主に出会った時の様子、そして、その後、どのような者へと変えられたかについて語っています。5節「私は、私たちの宗教の最も厳格な派に従って、パリサイ人として生活してまいりました」。ここでパウロは、このように言うことで、自分がユダヤ人と同じルーツを持つ者であること、つまり、同じ方を神とし、そのお方によって今も生かされていることを主張するのです。

そのことは、続く6-7節からもわかります。「そして今、神が私たちの父祖たちに約束されたものを待ち望んでいることで、私は裁判を受けているのです。7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでおります。王よ。私は、この希望のためにユダヤ人から訴えられているのです」。「私たちの父祖たち」「私たちの十二部族」とは、イスラエルのことですから、パウロは自分が信じ、また望みを置いているものが、ユダヤ人たちのそれと同じであり、それは同じ神様によって約束され、与えられるものであると言います。

では、なぜその同じ約束のものを待ち望みつつ、祭司長たちや長老たちは、パウロに対して強い殺意を抱き、でもパウロの方では、「自分は彼らに対して何もしていないし、またローマに対しても何もしていない」と、彼らの間に仲違いが生じたのでしょうか？それは初めから、そうであったわけではありません？9節「以前は、私自身も、ナザレ人イエスの名に強硬に敵対すべきだと考えていました」。ここに「ナザレ人イエスの名」と出てきますが、つまり、このイエスに対する理解の違い、その捉え方に違いが生じた時に、彼らの間にも不和が生じたのです。ただそれは、パウロに対する指導者たちの一方的な憎しみによりました。

というのも、ナザレのイエスに対する態度を変えたのが、パウロだからです。彼自身がここで語っているように、以前のパウロは、その名に強硬して敵対すべきだと考えていました。それゆえに、主を信じる者たちが殺される時には、賛成の票を投じ、また、すべての会堂や外国に至るまでクリスチャンたちを追いかけは、激しい怒りに燃えて、彼らを迫害したのです。その当時の指導者たちとパウロとの関係はどうであったか？というと、指導者たちは、そのようなこと（迫害）を実行する権限を与えることでパウロをサポートしていました。つまり、彼らはともにナザレのイエスの名に敵対していたのです。

ところが、自分の行っていることが間違いであることにパウロは気づかされます。それは、主イエスが、ダマスコに向かう途上にあったパウロに天からの光と御声（ヘブル語）をもって出会われたからです。それまでのパウロは、主イエスのことを神を冒瀆する者、ゆえに十字架にかけて殺された罪人に過ぎないと考えていました。ところが、その主から直接、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか？とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ」「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」（14-15節）という声を聞いたのです。そのような体験をして、その後もこの方に敵対できると思いますか？しかも彼は、主の声を聴いただけでなく、その光のゆえに目が見えなくなった後、主の名によって再び見えるようにされたのです。

この「とげのついた棒をける」とは、牛を仕事に追いやる時に、とげのあるむちを使った、という当時の農業生活から来た表現ですが、牛としては、しばしばそのむちを嫌って蹴ったわけです。でも、ければけるほど、それは自分を傷つけることになります。以前のパウロは、クリスチャンたち、つまり、教会を蹴っているつもりでした。でもそれは、実に、キリストご自身を、もっといって、彼が熱心に仕えているはずの神様ご自身を蹴ることだったのです。そのようにして彼は自分を痛めつけていました。

でも、そんな彼に現れて下さった主は、このように語られたのです。16-18 節「『…起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現れて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。17 わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである』」。

主が、パウロに現れたのは、彼をご自分に仕える者、またご自分を証する証人として任命し、イスラエルと異邦人のところに彼を遣わすことで、信じるすべての者に罪の赦しを得させ、御国を受け継がせるためでした。でも、彼がそのような働きをするためには、まず彼自身がそれに与る必要があったのです。つまり、彼の罪が赦され、御国を受け継ぐ者とされる必要がありました。では、パウロ自身のどこに、その罪が赦され、御国を受け継ぐ者とされる理由があったのでしょうか？神様に対する彼の熱心さは、評価されても良いのでは？と言いたいところですが、でも、その熱心さをもって、彼は神様に敵対していた、罪を犯していたわけですから、それが赦されるための理由となることはありません。

私たちはここに、神様のあわれみと赦しの御手が、すべての罪人に対して伸べされていることを見るのです。つまり、私たち人間のうちには、主によって罪赦され、御国を受け継ぐ者とされる理由はないのです。でも、そんな望みのない私たち罪人をご自分が救うことを、神様は望んで下さいました。それが神様をして、御子イエスを遣わし、彼が私たちの罪をすべて負うことで十字架にかかって死なれた理由です。その死によって、彼を信じる者が罪の赦しを得るためです。また神様は、主イエスを三日目によみがえらすことで、彼を信じる者に神の子となる特権と永遠のいのちを与えて下さいました。天の御国を受け継がせて下さるためです。

19-20 節「こういうわけで、アグリッパ王よ、私は、この天からの啓示にそむかず、20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです」。パウロは言いました。「私は、この天からの啓示にそむかず」と。皆さん、これがパウロをして、そのどこにおいても、主によって遣わされるところで、またユダヤ人、異邦人に関わらず、すべての人に悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えてきた理由です。彼は、天（上）からの啓示に従っていたのです。

このパウロの証言を、ユダヤ人たちは、特に主イエスの名に敵対すべきと考えた者たちは、信じなかったわけですが、それゆえに、彼らは、主イエスを十字架にかけて殺したように、パウロをも捕らえ、彼を殺そうとしました。でもパウロとしては、自分はユダヤ人たちと同じ神を信じているのであり、その方が自分たちの父祖たちに約束されたもの、つまり、その希望としての救い主（メシヤ）と御国について語る使命を受けているので、すべての人が悔い改めて神に立ち返ることを願い、自分自身を奉仕者、証人としてささげていたのです。

22-23 節「こうして、私はこの日に至るまで神の助けを受け、堅く立って、小さい者にも大きい者にもあかしをしているのです。そして、預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと以外は何も話しませんでした。23 すなわち、キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民と異邦人との最初に光を宣べ伝える、ということです」。

預言者たちやモーセとは、旧約聖書のことですが、当時の人々にとっては、それが聖書そのものでした。ですから、パウロが「預言者たちやモーセが、後に起こるはずだと語ったこと」という時、それは神様が聖書を通して語っておられたこと、ということです。その内容はこうです。「キリストは苦しみを受けること、また、死者の中からの復活によって、この民（ユダヤ人）と異邦人との最初に光を宣べ伝える、ということです」。

新改訳では、この「最初に」というのが、「光を宣べ伝えること」にかかっていますが、口語訳やESVでは、それは「死者の中からの復活」にかかっています。つまり、キリストは、死者の中から最初に復活されることによって、この民と異邦人ともに光を宣べ伝える」ということです。死者の復活の初穂として。

パウロは、自分がユダヤ人たちに訴えられているのは、この死者の復活という望みのゆえだと言いましたが、このことこそ、父なる神様が、「この民」としてのユダヤ人だけでなく、すべての人にキリストを通してもたらされる希望、その約束されたものです。私たちはみな、かつて罪とその結果である死のゆえに、暗やみの中にありました。それは同時に、サタンの支配のもとにあったことを意味しますが、その暗やみの中から光に、サタンの支配からご自身に立ち返らせるために、神様は、主イエスを遣わして下さったのです。主の十字架の死と復活によって、彼を信じるすべての者が、罪の赦しを得、御国を受け継ぐ者とされるためです。そして、それが確かなものであることを、主イエスは身をもって証明されました。

パウロは、他の使徒たちのように、復活の主の証人ではありません。でも、あのダマスコ途上で主ご自身が現れて下さったことによって、彼もまた主の証人とされたのです。では、どうですか？そのような天からの啓示は、皆がもっているものですか？本当の意味で、主の奉仕者、主の証人となるには、パウロのように特別な経験としての天からの啓示を受ける必要があるのですか？もしそうだとしたら、どれだけの人が、太陽よりも輝く主の光を見たことがありますか？パウロの場合は、ヘブル語でしたが、日本語か英語で、主の御声を聴いたという人はいますか？

「私には、そのような主からの特別な経験（啓示）がないので、パウロのように遣わされていない。主からの賜物は与えられていない。主を証することはできない」とは言わないでください。私たちにとっての「天からの啓示」とは、「みことば」ということができるからです。主イエスは、今日も聖書を通して語っておられるのです。私たちの方で聴く耳、聴く心を持ち、みことばに向かうなら、その細き御声と御霊の助けをもって、主はご自身の御心と私たちがどのように歩むべきかを示して下さいます。問題は、私たちにそのような心があるかどうか…。

主がパウロに直接語られたことを以前も見ましたが、それがどのような時であったかを覚えておられますか？まずは、今日も見た、彼の回心の時です。その後、パウロがエルサレムで証をした時、ユダヤ人たちによる殺害計画が起りましたが、主は彼に「エルサレムを離れ、異邦人のもとに行け」と語られました。またコリントでは、「恐れずに語り続けなさい」と語られることで、パウロはそこで腰を据えて伝道したのです。これは直接ではありませんが、主は御霊によって、エルサレムでなわめと苦しみが待つことを示され、その通りに、パウロがエルサレムで捕らえられ、ユダヤの議会で引き裂かれそうになった時、主は「勇気を出しなさい。あなたはエルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しなければならない」と語られました。

ですから、パウロが「天からの啓示にそむかず」と言った時、それは実にこのような歩みを指していたのです。つまり、それは主への従順を意味していました。いかがですか？今日、主と主のことばに対するあなたの態度は、従順といえますか？「天からの啓示にそむかず」とは、積極的な言い方をすると、それに進んで従う、ということです。ですから、「罪は避けるようにしている」というのでは十分ではありません。主が求めておられること、それはご自身の愛と恵みを知るすべての者が、進んでご自分に近づくことで、みことばと御霊によって語られ、主に仕え、主を証する者として歩むようになることです。主は、そのような人に、また、そのような人を通して、ご自身の光を、死者の復活という望みについて、いよいよわからせて下さるのです。